蒐載し、なほ山本信哉博士所述白川神道の研究を題目のみのまゝ加へた。

つまり、序論の外には伯家關係のあらゆる文獻の解題を主とし、これと共に主なる資料の選輯であるが、由緒の深い伯家の祭儀行事、諸作法調度はこれによつて窺ふに易からしめ、なほ研究を要すべき白川神道なるものゝこよなき案内書ともなるべきものである。これはひとり伯家學の考究者のみに便益するのみのものではない、殊に資料編中、大嘗會儀、神祇官年中行事、諸王の日記、又廣田西宮兩社の舊記文書などには一般國史の上にも稗補するものが見出されうるであらう。この書、項目の類別排列上になほ整理を要すべき點もあらうが、とまれ、斯かる特殊の業績が常人に企てられがたいのを祠人たる斯の人の手になされたことに、人なみならぬ勞を謝してよからう。（菊判六百三十三頁、圖版二十七。非賣品。西宮神社社務所發行）（以上加藤竹男）

◉新羅史研究　　今西　龍遺著

著者は私の先考である。昨年五月父の卒去後、遂早く藤田先生を主唱とする末松、田川等の諸氏によつて、遺稿出版のことが提議されたとき、私は感激と感謝の念に燃え遺稿の凡てを提出して、その整理出版の事をお願ひした。實は父の生前、著述の纒めて一書を成すものなく、折に觸れて、このことが話題に上ると、若し早晩死んだら之でも出版しておけと云つたのは、父が平生雜誌類に發表したものゝ中から選擇して一と纒めに綴ぢ、常住座邊にして加筆怠らなかつたものである。茲に於てか父の僅底の凡てを曝け出すといふことは多分にその志を無にするものであつたかも知れない。然し周圍からの慫慂と私自らひそかに父の業績を自負する氣持とは自らの行爲を是正付けることが出來た。かくして既發表、未發表のものを總合した結果は、父の出版を希望したものゝ數倍に達し、到底一二册には纒め難いことが判明したので、之を適宜數册に分つことゝし、今回その第一册として出版されたものが前記藤田先生其他の方々の編纂を仰いだ新羅史研究である。新羅史概説以下凡て二十五編、既發表未發表兩者は數に於て相半ばする。卷頭先づ飾るに恩師坪井先生の序文を以てしたことは、その朝鮮史研究の動機と全く先生の教導に負うた著者の述作として意義深きものと云はなければならぬ。

今内容の主なるものに就き順を追うて一瞥するに、先づ最初の「新羅史概説」は大正四年及び七年度の京都大學に於ける講義草案を末松氏の手によつて補正謄寫されしもの。一新羅本源地の地勢、二新羅の建國、三建國傳説、四新羅の階級と官位、五新羅の興起、六新羅の中代、七新羅の下代、八新羅中代下代の外國關係の八章に分ち、從來の朝鮮史籍三國史記、三國遺事等に見ゆる新羅史の附會極まりなきを本原の姿に還元せんと試みてゐることに、著者研究法の一端を伺ふであらう。著者は晩年

朝鮮史の概説を完成する意圖の下に先づ「百濟史講話」の執筆にかゝり、繼いで或ひは同時に、「新羅史講話」の著作に進まうとしたが前者すらその完成を見なかつたことは、著者の抱負を知る私として遺憾に堪へない。

「新羅舊都慶州の地勢及び其の遺蹟遺物」及び「慶州に於ける新羅の墳墓及び其の遺物に就て」は共に明治三十九年、著者初度の渡鮮調査報告にして、又著者の處女發表とも云ふ可きもの。釜山より慰山を經て慶州に入るに馬上尙週餘の日數を要し、景明王の最後に有名なる鮑石亭址を探ること數日なるも終に發見し能はなかつた當時のことである。後者の所説目次に慶州古墳の構造、內部遺物等を論ずること見えて、實は本文未完成に終り、慶州に於ける最初の古墳發掘の記事を缺くことを惜しむ可きに似たるも、地平面の積石層に達したのみにて新羅古墳には何ものもなしと結論した失敗は著者の再度筆にし能はなかつた所であらう。「慶州聞見雜記」は大正十五年七月、同じ慶州の地の探査手記乍ら二十年間に於ける著者の老成振りを見る。

「新羅骨品考」は宮崎博士の所説を補ひ新羅に骨品と稱する種又は族の意義にして、その別に聖骨、新骨、六頭品、五頭品等あるを詳說し併せて新羅の國家、社會組織を解明せんとしたもので蓋し著者力作の一つと評あるもの。續く「新羅骨品聖而考」は聖骨を聖而と稱することの考證にして前者を補ふものである。

「新羅葛文王考」は葛文王なる文字の實際的用例よりその字義の解釋に及び、この語は上代にあつては生存貴人の特殊なものゝ稱號であつたが下代に於ては追封王の稱號となつたと論ず。又前者と一聯をなす論文であらう。

「慈覺大師入唐求法巡禮行記を讀みて」は未定稿乍ら九十頁に亙り、一王行則碑に就きて、二張高寶に就きて、三在唐新羅人の狀況、四新羅人の航海術と之に賴りたる日唐の交通、五新羅の北方航路に就きての五節よりなり慈覺大師求法巡禮記の新羅史資料として極めて重要なものであることを示してゐる。昭和二年春東洋文庫の東寺觀智院本巡禮行記影印本一部の配布を受けた著者は興起るが儘に十數日の短時日を以てこの一編を成した。當時京都の寓居に意氣軒昂たりし著書の俤今に忘れ難いものである。

「新羅崔致遠傳」は新羅末の文人崔致遠の傳を叙しその遺書桂苑筆耕、他數種の遺文を解明す。「崔致遠の遣宿衞學生還蕃狀の製作年時に就きて」は右の補號とも見る可きもの。

「新羅圓光法師傳」は法師の傳を述ぶる前半、半島に佛敎傳來の由來を說く。通俗講演の筆記で學術的のものではないが、著者の性格篇中に橫溢して興あり。

「新羅眞興王巡狩管境碑考」は眞興王巡狩碑として名ある草領、北漢山、昌寧の三碑に就き、その史的價値を闡明したもの。眞興王巡狩碑は近年更に咸鏡南道利原に發見されたが著者は未だ其の考究に及ばず、又草嶺碑も著者の沒後間もなくその欠石

一片が發行された。以下「新羅文武王陵碑に就きて」「慶州栢栗寺六面石憧刻文」「鷲棲寺舍利石盒刻記」「聖德大王神鐘之銘」等何れも巡狩碑考と同じく、金石文の釋讀である。その文獻考古學的な考究法は蓋し著者特意の壇上であつた。「慶州所藏玉笛考」及び「新羅時代の土器に彫刻せる神話」は最初の慶州調査記と同時の所産、その考古癖はこの時分に胚胎してゐた。

最後に「鉄原の名勝孤石亭」及び「到彼岸寺佛像調査記」は昭和六年眞夏、私もその行を共にした折の江原道鉄原地方に於ける調査記である。本篇には皇紀を採用してゐるがそれは著者晩年の持論であつた。

以上本書内容の主なるものにつき一瞥した次第であるが、その統一を缺いて蕪雜の感を與へ、所論亦往々にして前後撞着するものあるも、之は著者自身によつて意圖せられた著作でない事を顧慮されねばならないであらう。寧ろその大體に於て新羅史研究に於けるワイタル・ポイントを把握して誤らなかつたことを認めてよからうと思ふ。新羅史研究の正しき進展と輝かしき業蹟とは、かゝる述作を捨て石とする今後にこそ期せられねばならぬ。

終りに編纂者によつて原文缺く所の補註を數多く加へられたことは結構であるが、本書を讀む程のものに取つては往々不必要である思或ひは煩に過ぎると思はれるものがないでもない。誤植の多いのも否み難いといふことを私は恐る〳〵申し上げる。（菊判五九五頁、圖版八葉、京城近澤書店發行、定價五圓）（今西春秋）

◉永和九年在銘塼出土古墳調査報告

――朝鮮總督府昭和七年度古蹟調査報告第一册――

野守　健　榧本龜次郎著

昭和七年、平壤驛の構内にて發掘された古墳で、「永和九年三月十日遼東韓玄菟太守佟利造」と銘のある塼を使用してゐたので當初より諸學者の注意を惹いてゐたが、いまこの報告を得て詳細にその古墳の狀態を知り得ることは甚だ幸である。それにはかく迅速に報告を公にされた兩氏の勞か深く多としなければならない。

この古墳は樂浪遺蹟に普通見る塼室墓に似ず、下半部を塼積み、上半部を石積みにし、しかもそれに漆喰を塗つてゐる。本棺は二個あつたらしく、鐵釘、鐵鏃、牛骨製の弓弭と覺しきもの、漆杯等の遺物を出土したが、特に興味を惹くものは三國時代の南鮮に普通見る耳飾の環を出土せることである。末期の變異せる塼室墓、しかも樂浪郡滅亡の年として知られてゐる西晉愍帝の建興元年（西紀三一三）を後れること四十年の年號紀銘を有つてゐる塼室墓から、南鮮風の耳飾を出土したことは、今年度の發掘に於いて樂浪の木槨墓から勾玉樣のものゝ出土したことと共に歷史的上の興味をそゝることが深い。記述も簡潔であり、記銘の解釋も穩當である。終には樂浪帶方郡地方の紀年塼集錄を附載する。文獻的研究にも參考になるところの多い報告書で